

制度編成とアーカイヴィング・メソッド解題

渡辺 克典

(立命館大学)

特集「制度編成とアーカイヴィング・メソッド」は2018年度生存学研究センター研究プロジェクト「生存をめぐる制度編成研究プロジェクト」の成果として編まれている。生存をめぐる制度編成の歴史研究とアーカイヴィング集積を研究課題とする本プロジェクトは、その目的と方針を以下のように置いている。

生存において困難を抱える人びとに対して、医療、福祉、あるいは教育といったさまざまな制度による取り組みが行われている。この過程において、統治体制や事業体が協調しときに衝突し、あるいは学術的な実践において障害や病を心的または個人的な問題として正統化され、制度編成がすすんできた。私たちの生存のあり方とそれに抗する技法を考える上において、これらの法あるいは制度設計、政策過程において社会や歴史との連関をめぐる研究が課題となっている。

本研究プロジェクトでは、生存に困難を抱える人びととして「障老病異」に関する制度編成に着目し、その社会的・歴史的な形成過程に関する歴史研究をおこなう。本研究では、制度編成をたんなる法的な体系や政策としてとらえるのではなく、統治体制としての行政機関（内務省、厚生省、文部省等）とともに、その正統化を担った学術実践（医学、教育学、社会福祉学等）、中央ならびに地方における民間をふくめた社会事業体、そしてそれに抗する当事者による団体活動といった多様な組織が連なり／重なる領域として設定し、その内部においておこなわれる社会過程のていねいな記述と制度過程における因果関係について探求することを目指す。

生存学研究センターでは、2013年に「メジャーな「体制」の歴史に、マイナーな「体制」の歴史の視座を持ち込むことで、メジャーな「体制」の歴史を批判的にとらえかえそうとする」ことを目指した『体制の歴史』（天田城介・角崎洋平・櫻井悟史編、洛北出版）を刊行してい

る。このプロジェクトは、『体制の歴史』と同様の目的をもちながら、生存学研究センターの掲げる「生存をめぐる制度・政策」に対して、制度が編まれるありようとその構成（＝編成）に着目した研究を継続するのとともに、そういった「マイナー」とみなされがちな歴史と体制を研究するうえで生存学が重視するアーカイヴィングのあり方も問うことを課題とした。

このたびの特集では、次の2つの特徴をもつ論者が掲載されている。

第1に、佐草智久「後発地域の家庭奉仕員派遣事業の展開に関する検討——北海道札幌地域を事例に」、橋本雄太「学校教育における吃音矯正の導入——楽石社の社会事業と東京の吃音学級との関わり」、伊東香純「ヨーロッパの精神障害者の組織の発足の過程」の3論考は、特集査読論文として掲載されている。『立命館生存学研究』では、公募論文だけではなく特集においても査読論文を掲載する方針が示され、本号においてそれが実現された¹⁾。特集査読論文は、論文投稿に先立って特集エントリー（本号において、特集へのエントリー締め切りは公募論文の投稿締め切りよりも約3か月早く設定されていた）がおこなわれ、特集のテーマ「制度編成とアーカイヴィング・メソッド」は審議を経たうえで採択された。エントリーとしての採択を受け、公募論文と同じ規程に沿い、同一のスケジュール・審査体制で査読の後、掲載に至っている。3本の論文は、大学院生としての指導教員からの指導にくわえて、本プロジェクトが開催する研究会においてメンバー全員によって議論された。各論文の研究課題は、家庭奉仕員派遣事業、言語障害教育、精神医療福祉制度をめぐる編成となっており、それぞれの主題はばらばらであるように見えるが、いずれのテーマにおいてもこれまでマイナーとみなされがちであった人びとの生存をめぐる制度・政策の歴史、あるいは生存学が探求する当事者活動への視座をふくみ、本誌の特集査読論文にかなう論文である。

第2に、渡辺克典「制度編成研究と社会運動メディア・アーカイヴィングの架橋」、塩野麻子「障害者総合情報ネットワークの『アーカイヴィング・メソッド』」、伊東

香純「障害者に関する欠格条項の見直しの過程——障害者総合情報ネットワーク所蔵資料の活用法の一例」、櫻井悟史「障害者の移動の自由とユニバーサルツーリズムの歴史のために——障害者総合情報ネットワーク所蔵資料の活用法の一例」は、本プロジェクトの研究課題である「歴史研究とアーカイビング集積」に関連して、生存学が所蔵する障害者総合情報ネットワークに焦点化したエッセイ集となっている。渡辺論考は、本特集の前半部にあたる3つの特集査読論文で論じられた制度編成に関わる事業／運動（闘争）／機関／組織といった諸概念／実践と、後半部のアーカイビング集積に関する論点をつなげる補助線として記されている。塩野論考は障害者総合情報ネットワークが成立する歴史的な文脈と資料の特徴についてまとめており、伊東論考・櫻井論考は同資料を用いた応用研究の端緒を開く。

特集査読論文とエッセイによって構成された本特集は、いずれも生存学に関わる院生と専門研究員による力作が揃うことになった。読者には、生存学研究の発展に向けた「批判」と、生存をめぐる制度編成研究プロジェクトへの助言を承りたい。

最後に、末筆ではあるが、本特集は立命館大学生存学研究センター・研究プロジェクトの助成による成果の一部である。記して感謝を申し上げたい。

注

- 1) なお、特集に査読論文を掲載する方式は『立命館生存学研究』の前誌となる雑誌『生存学』（生活書院、第9号まで刊行）で実施されている。